

2020 年第 8 回講義（政経）

2020 年 11 月 1 日

ガンディー インドの叡智

立教大学法学部教授

竹中 千春

はじめに

自己紹介をしますと、私自身は日本の戦争時代を知らない世代であり、学校の先生に「戦争をしてはいけない」と教わった世代です。小学校の 4 年間は、父の仕事のため広島市で暮らしましたが、そのおかげで学校や社会を通して原爆や被爆の方々について知り、毎年 8 月 6 日の被爆式典も校庭で経験しました。だからこそですが、子どもながらに、平和とか憲法 9 条、8 月 15 日の終戦などの複雑さを感じながら育ったと思います。

そうした背景もあり、マハートマ・ガンディーに惹かれ、国際政治やインド研究を始めました。今日は「インドの叡智」を副題として、「ガンディー」について述べます。さらに、彼とともに社会を動かし、歴史を作り、新たな時代を切り開いた民衆の歩みも考えたいと思います。

インドは日本から遠く離れていますが、人間としての知恵を伝えてもらってきました。今日でも多くの日本人は仏教徒ですが、インドの仏教は世界に繋がり、日本にも伝えられて来ました。インドの叡智は古い時代から、私達にもとても深い縁のあるものだと思います。

1. 若きガンディー

ガンディーの生地は、アラビア海に面したグジャラート州、現在のパキスタンに近くアラビア海に面した州で、父はポールバンドル藩王国の宰相でした。彼は海を愛し、ヨーロッパにも南アフリカにも行きました。海に臨む港は、さまざまな人々や文化の交流の拠点です。キリスト教、ユダヤ教、拝火教、イスラム教等もこの地で共存し交わっていました。海のシルクロードです。これらが、幼きガンディーの世界観を作った社会の土台でした。

父親はマハラジャ（王）に仕える宰相、つまり行政官でしたから、幼年期のガンディーには少なからず政治的な影響を与えたと思われます。重要な決定をするとき、子ども時代のポールバンドルの海辺を思い出したと、ガンディーは書いています。ちょうど日本の明治維新のころ生まれた人なので、だいたい福沢諭吉より年下の人ですね。

当時のインド亜大陸は、直轄植民地の英領インドと、500 以上の藩王国から成っていました。大英帝国の繁栄と安定を誇ったヴィクトリア女王時代であり、インド社会の流れとしても、これからはイギリスの時代だ、息子を出世させるにはイギリス風の新しい学校に行かせて英語教育を施さなければという考え方が流行り始めました。ともかく、統治して社会を動かすイギリス人には、自分たちの言葉を理解できる現地人が不可欠だったのです。

ガンディーは、当時の慣習に従って 13 歳で同じ年の少女と結婚し、17 歳で父を亡くし、最初に生まれた子供も失いました。これらを、ハイスクールに通いながら経験したのです。後に、伝統的な慣習の悪弊を乗り越えるべきだと身に沁みて感じるようになりました。他方、

故郷に近い新設大学に入学したのですが、すぐに挫折してしまいました。当時の植民地では、法学部が出世コースでしたが、暗記式の詰め込み教育に一学期で音を上げてしまい、夏休みにはドロップアウトしてしまいます。その後、知り合いのすすめもあり、ロンドンに留学したいと希望します。親戚（カースト）の大反対にあいますが、母親が賛成し、父の後を継いでいた兄も援助してくれて、私費でロンドンに渡ることになりました。19歳のときです。3年間の滞在を経て、晴れて弁護士資格を得て、1991年にインドに帰国しました。

ロンドン留学中は、自由を謳歌し、イギリスの政治や選挙、市民、議会主義、市民的な団体、今でいうとNGOですね、それから学校や大学、言論の自由などを思い切り経験しました。基本的に、ガンディーはイギリスが大好きでした。しかし、帰国後は困難に見舞われます。英領インドでの法律実務の経験はない。プライドは高い。そういうガンディーは仕事に失敗し、家族がいるにもかかわらず十分な収入のない、情けない有様でした。失業状態です。けれども、このときの挫折が、南アフリカへ渡るといふ、人生の次の飛躍につながったとも言えます。

2. 南アフリカのインド人弁護士ガンディー

南アフリカに弁護士として渡ったのは23歳のときでしたが、なんと40代半ばまで22年近く滞在することになりました。最初は一年で帰国するつもりでしたから、自ら計画した海外生活ではなかったのです。しかも、当時の南アフリカは、英領インドに比べても、辺境の植民地でした。だからこそ、インド亜大陸から、剛健な体を持つ何万人ものインド系の人々が、厳しい条件下でも働く契約労働者として呼び寄せられていたのです。プランテーション、金やダイヤモンドの鉱山、工場や建設現場などで働かされました。また、そうした人々を相手に商いを行う商人も渡ってきていました。そうした同郷の商人が、法律問題を解決するために、ガンディーを招いたのです。南アフリカは白人と呼ばれたヨーロッパ系の人々が支配する社会で、ヨーロッパ系の弁護士はインド人のためには働いてくれない。だから、インド人の弁護士が必要だという話でした。

やがて、ガンディーはこうした人々にとって「公僕」としての働きをするようになり、仲間とともに「サットィヤーグラハ」の思想と運動を鍛え上げていくことになりました。「非暴力の信念—草の根活動家—信頼できる仲間—日々の訓練—対話による正義の訓練」というふうに整理できるでしょう。

その土台には、インド人移民のコミュニティー作りがありました。まず、情報共有、啓蒙や教育のために、『インディアン・オピニオン』という新聞を発行しました。まさに、彼は、新聞の記事を書き、新聞を印刷し、販売・配布するというジャーナリストや経営者の役割を担ったのです。しかも、英語、グジャラート語、タミール語の複数言語で発行し、言語を越えた仲間作りをめざしました。そして、多くのインド人移民を支える運動をしていく中で、非暴力不服従運動としてのサットィヤーグラハを創造していきます。ボーア戦争やズールー戦争と呼ばれた植民地戦争も経験しつつ、イギリス系とオランダ系ボーア人の双方が白

人として統治していく、まさにアパルトヘイトという人種差別体制の原型が作られていく時代に、有色人種としてのインド人の権利を守る運動の中心になっていったのです。

R・アッテンボロー監督の映画『ガンディー』の前半部分は、まさに南アフリカ時代のガンディーが描かれています。インド人の慣習にそった結婚では正当な結婚とは認めない、理不尽な高い税金を課す、インド人移民の証明書保持を義務づける、移民を制限するなど、さまざまな問題を取上げ、現地の仲間と考え、イギリスやインドの人々に訴え、現状を改革しようとしたのでした。その過程で、民衆の指導者としてのガンディーが育っていきました。

3. 「国民の父」ガンディーの登場

1915年、第一次世界大戦の半ばに、ガンディーはインドに帰国し、その後、インドのナショナリズム運動の指導者として活躍することになりました。この辺りは、日本の高校の『世界史』にも書かれているので、よくご存じではないかと思います。第一次世界大戦中から次第に注目を集めていたガンディーは、大戦直後の1919年、イギリスがインドに課した新しい治安立法としてのローラット法をめぐる全国的抗議運動を指導し、最初の非暴力不服従運動を展開します。

有名な「塩の行進」について説明しておきましょう。当時の社会状況は、2010年代の世界と類似しています。1920年代の半ば、大戦後の経済状態が改善して景気が上向きますが、1927年頃から再び悪化し、工場労働者の解雇や賃金カットが続き、労働運動が激しくなります。また農業不振のために、地代や地租をめぐる農民の運動も頻発しました。そうした社会不安を前に、1929年秋に「世界大恐慌」がアメリカ発で発生し、世界に広がって、イギリスやインドにも大きな被害がもたらされました。

経済が悪いと、政治が問い直されます。地主や工場主や商店主や金貸しが批判されるだけでなく、イギリス人の牛耳っているインド政府が批判的となります。こんな時にも、イギリス人はインド人から税金を奪っている。もしもインド人の政府ができたのなら、違う状況になるだろう。そういう声が高まってきたときに、もう一度、ガンディーに全国的なナショナリズム運動を指導してほしいという期待が集まります。インド国民会議派というナショナリスト政党の年次総会が年末に開かれ、翌年には全国的な反英運動を実施すると決議されるとともに、ガンディーをその最高指揮官とすることも決定されました。実は、少し前まで、ガンディーは刑務所に収監され、解放後もアーシュラムで静かに暮らしていたのですが、国民的な危機を前に呼び戻された格好となりました。

けれども、多くのナショナリストにせかされながらも、ガンディーはなかなか運動プランを公にしません。彼は、どんな運動なら人心を掌握できるのか、国民すべてが参加できるのか、イギリスや世論に対して力を発揮できるのか、そして非暴力的な形で実現できるのかについて、悩み続けました。彼はマジシャンとも言われますが、発明家であり、クリエイターだったのです。「国民全てが参加出来て、しかもイギリスが本当に困り、世界にも訴えられる、皆を動かし目に見える運動は何か？」6週間も蟄居して生み出した答えは、「塩だ！」

というものでした。当時、イギリス人の政府は高い塩税を課していたのですが、それこそが帝国主義の象徴だとして実践的に拒む運動方法を生み出したのです。「人は誰もが塩なしでは生きて行けない!」。塩は天然のものなのに、イギリス人が不当にインド人から奪っている、と。1930年3月グジャラートの都市アーメダバードの郊外にある修道場から78名の弟子と出発して村々を行脚し、4月5日に海辺の町ダンディに到着しました。そして、朝日に輝く海岸で、砂浜から塩をつかみ上げた彼の姿は、新聞記者によって一斉に報道されました。さらに、これを合図に、全国の運動が開始されました。「イギリスが作った塩法は悪法なり!我々に正義があり非暴力不服従で戦う。」二回目の非暴力不服従の戦いとなりました。

4. マハートマ・ガンディーの思想と運動

以上のようなガンディーの思想と運動について、お話ししましょう。いくつか、彼が強調したキーワードを挙げてみます。まず、「サットィヤーグラハ」です。非暴力の市民不服従運動をこの言葉で呼んでいます。言葉そのものは古いインドの文化に根ざしています。

「サットィヤー」は、仏教でも使われるように、「真理」を意味する言葉です。「アヒンサ」は「非暴力」を意味します。「ヒンサ(暴力)」の否定です。仏教やジャイナ教でも「不殺生」という意味で使われます。

次に、「アーシュラム」。これは、「修道場」の意味です。現在でもそうですが、インドの社会は多様な人々が成る社会で、宗教・カースト・エスニシティ・言語、そのほかさまざまな亀裂や対立が起りやすい。だからこそ、ガンディーは「違いや対立を越えて皆で暮らす共同体」を作ろうとしました。アイデアとしては、ロシアの文豪トルストイの文章から学んで、南アフリカで「トルストイ農場」「フェニックス農場」をつくりました。インドに帰った後は、地元の人々にわかりやすい言葉で「アーシュラム」として、仲間が共同で暮らす場所を造っていかうとしました。

「スワラージ」は、インド史においては「自治」「独立」に等置されて使われてきましたが、ガンディーはより広く「人間としての自立」という意味合いも込めて使いました。当時のインドは、イギリスの植民地ですから、イギリス人が政府の財政も動かし、戦争するかどうかも決めていました。そんな状況を変えていくために、自治や独立を目標として掲げたのです。とはいえ、「自治 (self-government)」「独立 (independence)」と英語で話しても、英語のできない民衆、つまり農民や労働者には伝わりません。ですから、現地の言葉を生かして、自分の王国という意味での「スワラージ (Swaraj)」を使いました。「スワ (swa-)」は、「自分の」という意味で、「ラージ (raj)」は王や王国を指します。

さらに、ガンディーは、一人の人間が自分自身を統制する、つまり統治するという意味でも、「スワラージ」を使いました。感情や行動をしっかりとコントロールできることです。そして、イギリスの工場で生産された衣服を着ているのは、真のスワラージはないと考えました。まさに、自分たちが作り、使い、生きるという、衣食住からの自立や独立が、インドのスワラージを実現すると説いたのです。

イギリスの産業革命以降、植民地となったインドは、マンチェスターやリバプールの綿工場が生産する製品を購入する市場となっていました。その裏側では、インドの綿糸や綿布の手工業は滅びてしまいました。そうした、かつてインドが持っていた生産力を再興し、自分たちが糸車を回して糸を紡ぎ、質素でも手織りの布を使って、自分たちの衣をつくろう。ガンディーはそう考えたのです。

一般的には、ガンディーのイメージは修道僧のような古くさいものかもしれませんが。けれども、今風に言えば、社会改革や人々の救済をめざす NGO 活動家やソーシャルワーカーでもあり、ドロドロした政治の世界でも活動した人です。そう考えてみると、けっこう面白い人だと思います。なぜ、ガンディーは政治の中で生きたのか。政治における「力」は、武力と考えられがちですし、近代国家では軍隊が統治や防衛の柱とされています。国際政治とは、軍隊を持つ国同士が競合する「パワーポリティクス（権力政治）」だと論じられます。ガンディーは、まさにこうした政治の発想に挑戦したのだと思います。

5. インドの民主主義とガンディーの教え

さて、独立後のインドでも、ガンディー主義の影響は脈々と残ってきたと思います。それは、民衆の戦いの思想と方法という意味です。インド社会は激動の歴史をくぐってきました。1947年の独立後は、「インド型社会主義」の実験が行われ、1960年代後半から1970年代には「緑の革命」という開発モデルを経験したのですが、1991年12月後社会主義の看板が下ろされると、「グローバル市場経済」という世界的な競争の中にインドの人々の置かれることになりました。こうした長い歴史において、多くの国民が関心を寄せてきたのは、貧困からの脱出です。自分の代では無理でも、子どもたちを学校に行かせて卒業させ、収入のある就職をさせたい。人々は懸命に考え、行動してきました。したがって、そうした力が、インドの民主主義や国家をも動かしてきたと言えます。

たとえば、「アドヴォカシー（権利主張）の一票」というお話をしましょう。この数十年間、ウッタル・プラデーシュ州（ガンジス川流域で2億人以上の人口を擁すインド最大の州）の政治は、劇的に展開してきました。とくに、ダリットという、カースト社会ではもっとも底辺の身分の出身である女性マヤワティが、1990年代以来、幾度も州首相を務めたことは、革命的なことだと言えます。かつては不可触民と呼ばれ、独立後の憲法では Scheduled Caste(SC)として特別な制度的保護を受けるカーストに属しながら、奨学金を得て学び、デリー大学法学部を卒業し、小学校の教員となり、やがてこのカーストを中心的な支持基盤とする政党の政治家として頭角を現しました。

もう一枚の写真は、2009年の連邦下院議会議員選挙（総選挙）のときに、同州の選挙調査を行ったときに偶然会った、有権者の女性を撮影したものです。おそらくはダリットに属すこの女性は、「マヤワティ姉さんに投票するために来たのよ」と、誇らしげに語ってくれました。こういう女性の有権者が、男性の家族、つまり父や夫や兄などに連れられて来て、言われるがまま投票するのではなく、また特定の政党を支持する暴力集団などにも脅され

ずに、自分の考えで票を投じる。すばらしいことです。そもそも、自分の投票した政党や指導者が勝利すれば、次の 5 年間は警官や暴力集団にも迫害されない。役所の役人にもちゃんと対応してもらえて、補助金の申請なども妨害されない。だから村も平和で、子どもたちも安心して学校に通える。つまり、「一票の力」をこの女性は良く理解している。この女性の姿にも、ガンディーとともに歴史を築いた人々の歩みが反映していると思います。

もう一つは、やはりウツタル・プラデーシュ州の農村地域でのことですが、自分たちの力で井戸を建設した女性たちの物語です。すでに述べたようなダリットの人々、「部族(Tribes)」とも呼ばれた先住民系の人々、そしてより人口の多い「シュードラ(農奴)」と呼ばれ差別されてきた農民たちの女性たちが連体し、NGO に集まって井戸の建設を計画し、実現しました。根底には、自分たちの農村の貧しさの原因に深刻な水不足があるという考えがありました。地主階級は、政府や世界銀行の支援を受けて、井戸や水路を建設し利用しているが、貧しい農民には水を十分に与えない。政治家や役人は地主側たちの味方をしてきた。そこで、専門教育を受けたソーシャルワーカーの女性指導者を募り、地元の女性たちが NGO に集った。この NGO が、日本の立正佼成会の庭野平和財団の南アジア女性プログラムに申請し、競争を勝ち抜いて助成対象に採択され、その助成金をもとに 2 年以上をかけてダムを建設したのです。写真は、ダムの開所式に私も参加したと 2006 年のときのものです。

他に、ニューデリーで活動する女性 NGO についても、お話ししておきましょう。スラム再開発で造成された町に住む貧しい女性たちが集まり、自分たちの銀行をつくる「マイクロ・クレジット」のしくみに参加し支えるだけでなく、多様な学習を行います。彼女たちは、メイドや内職の仕事をしたり、家事や育児をしたり、多忙な人々なのですが、同時に地元社会の重要な主体です。そうした女性たちが、NGO の本拠地に集まって週一回の勉強会で学び、各地区の草の根女性リーダーとして女性差別撤廃条約の意味などを大学院生やソーシャルワーカーとともに学習し、国際女性デーの計画を実践します。また、こうして獲得した知識や技術をもとに、それぞれの地区で女性の住民の勉強会を主催します。私が参加したときには、「職場でセクハラを受けた場合にはどう対応するか」というテーマを扱ったパンフレットをもとに、勉強会に出席した住民の女性たちと議論していました。十代の少女たちを対象とした職業訓練の場を設けたり、エイズなどの病気や栄養改善についての勉強会をしたり、暴力事件などについての法律相談もします。まさに、アドヴォカシーとエンパワーメントのための活動なのです。

私自身は、本や新聞ではなかなか伝わってこないインド社会の顔、とくに普通の人々の考えや活動を知りたいと思って現地調査をしてきました。なかでも感動的なのは、これらの NGO や人々の活動において、宗教やカースト身分やその他の違いを越え、自由で平等な主体として民主主義的に協力するという原則を守られていることでした。まさに、インドの民主主義の現場としての草の根社会に触れることができました。草の根のサッティヤーグラハを实践したガンディーや彼とともに働いた人々の歴史が、感じられる一瞬でした。

6. ガンディー伝 (*Gandhiyana*) の伝播

さて、このようなガンディーの思想や実践は、驚くべきことに、2010年代のグローバリゼーション時代の世界にも影響を与えています。武力を用いず、非暴力的に自分たちの正義や権利を実現しようとする市民や民衆の運動では、必ずといってよいほど、ガンディーの名前や「アヒンサ」という言葉が引かれています。

アメリカの公民権運動を率いたキング牧師は有名です。リンカーン大統領が奴隷解放宣言を行ったのは1860年代ですが、アフリカ系の人々は、それ以後も引き続き差別され弾圧されていた。そうした人種差別を克服しようという運動が1950年代後半から60年代にかけて高まったのですが、キング牧師は、ガンディーに非暴力市民不服従の精神と方法を学んだと繰り返し語りました。2008年にアメリカで初めてのアフリカ系の大統領となったバラク・オバマ氏は、キング牧師を師と仰ぎ、さらにガンディーを深く尊敬していました。

けれども、アメリカの民主主義は動揺しています。今年、2020年は、アメリカ大統領選挙の年ですが、新型コロナ・ウイルスの感染拡大という問題も重なり、深刻な緊張がアメリカ社会を分断しました。ミネソタ州ミネアポリス市でアフリカ系の青年が警官に射殺される事件が起こり、それに対する抗議運動に端を発して、全米に人種差別反対運動が展開しました。「BLM (Black Lives Matter)」の運動です。マイノリティや移民を敵視する集団との衝突が回避できないほどの緊張状況で、抗議運動を行う若者の中からキング牧師やガンディーの精神を説くリーダーが登場し、非暴力が貫かれた現場についての報道も流れました。

他にも、ガンディーや非暴力主義が生きている現場の写真を紹介しましょう。一つは、最近注目されている、気候変動に対する取り組みを訴える集会やデモ行進。この写真が撮影されたタイのバンコクでは、若い学生や留学生を中心に抗議運動が非暴力に展開していました。あるいは、紛争の続くパレスティナで非暴力の祈りを捧げる人々の集会。また、歴史的には、南アフリカのアパルトヘイト撤廃運動。フィリピンやポーランドの民主化運動。そのほか、さまざまな場所や時に、非暴力的な改革を行い、人権や民主主義を守ろうとする人々がガンディーの思想や運動を参照してきました。最近では、香港の自由を守れという運動にガンディーの名前が登場しています。つまり、ガンディーと彼の仲間たちが生み出した「サッティヤーグラハ」は、人類共通の宝になっていると思います。

さて、このようにガンディー伝を語ると、なんだかガンディーが神様のような遠い存在に思えてきます。けれども、最初にお話ししたように、福沢諭吉よりも若い現代人だったし、ガンディーは非常に多才な人でした。ナショナリズム政治の際立った政治指導者でしたが、宗教を語り精神を説く教師でしたし、イギリスの資格を持つ有能な弁護士でもあり、新聞の記事を書き発行するジャーナリスト兼経営者でもあった。そして、貧しい人たちと一緒に暮らす、修道場のNGO活動家でもある。おもしろいですね。しかしだからこそ、神様のようなありがたい存在として、民衆が「マハートマ」と呼ぶようになったのでした。「マハートマ」とは、「大いなる (マハー)」「アートマ (魂)」で、「大聖人」といった意味合いです。日蓮聖人とか、親鸞聖人とか、日本の歴史の中にも数々のマハートマがいます。

その聖人ぶりは、死を前にしたときにも発揮されました。独立直前から独立後の時期、インド亜大陸の東西でヒンドゥー側とイスラム側の宗教暴動が激化しました。すでに 70 代後半となっていたガンディーでしたが、現在はバングラデシュにあたる北東インドの農村地域ノアカリを尋ね、数ヶ月滞在し、暴動の跡地を訪ね、今なら平和維持部隊 (PKO) や難民救済 NGO のような役割を果たしました。軍隊や警察の同行を断り、武器も持たないで暴動の現場を訪問し、暴徒たちに直接説得を試みたそうです。はいていた草履を脱いで、裸足でジャングルの中を歩いた話は有名です。最後にもう一度、若きガンディーは世界に雄飛した青年だったことを確認しておきたいと思います。狭い故郷を飛び出し、広大な海を旅し、言語の壁も越えて、見知らぬ人々の社会で暮らしたのです。多くの挫折や失敗もりましたが、知恵と勇気と行動力で仲間とともに前に進みました。1948 年 1 月末にヒンドゥー至上主義の男性に銃殺されるまで、仲間同士の殺し合いを止めようと、真摯に努力したのです。死の直前には、紛争の地カシミールにも行こうとしていました。振り返ってみれば、イエス・キリストもキング牧師も、愛と平和を説きながら殺されたのですが、ガンディーも命がけで「アヒンサ」を実践し、暴力によって倒されることになりました。

昨年、2019 年はガンディー生誕 80 周年で、インド大使館でもお祝いの式典がもたれました。そのときの講演でも、ガンディー伝は過去に閉じられるのではなく、未来に開かれることが大事だと思い、次のようなガンディーの言葉で締めくくりました。「真の平和を作るなら、真に戦争を無くそうとするなら、まず子どもたちから始めよう」、と。少子化時代の危機が叫ばれますが、日本の子どもだけでなく、インドの子どもや世界の子どもも、平和のうちに愛情を降り注いで大事に育てていくこと。そこから、戦争を止め平和を生み出す人々が登場してくれるのだと思います。ご静聴ありがとうございました。

質疑

Q, ガンディーの晩年は、インド国民会議派の党首と袂を分かって政敵になり、だから最後は暗殺されるという悲惨な結末になったのだろうか。

A, 確かに、ガンディーは頑固な一面があり、重要な場面で政治的な対立を避けないことがありました。1938 年に続いて、翌年の 1939 年にインド国民会議派の党首に選出されたチャンドラ・ボースと厳しく対立しますが、ガンディーに批判されたボースはけっきょく党首の座を追われる結果となりました。まもなく第二次世界大戦が始まり、イギリスに対する抵抗を呼びかけたボースは反逆者として囚われます。その後、甥の手伝いで自宅軟禁を逃れて逃亡し、ヨーロッパに行き、ドイツのヒトラーやイタリアのムッソリーニを訪ねた後、さらなる同盟を求めて日本の東條首相と手を組もうとします。戦争自体を否定したガンディーとは対照的な指導者だったのです。

もう一度ガンディーに話を戻すと、彼は皆に必要とされるときは、本当に頑張りました。私見では躁鬱的なところがあり、鬱になると体調も悪くなってしまうのですが、危機を前にして多くの人々に頼まれると、エネルギーが高まって強靱になります。灼熱の太陽の下を何

週間行脚しても大丈夫、みんなと歩き抜くことができる。つまり、人々を助けるという使命感に駆られると、力が出る人だったのですね。

けれども、民衆の運動は加速していくと暴力的に転じやすい。地主を殺すとか、ヒンズー教徒がイスラム教徒の人々を殺すとか。そんな時には、誰が反対しようと、ガンディーは民衆運動を停止しようとしていました。たとえば、1930年の塩の行進では、ガンディーの方針に従って戦っていた若者たちが刑務所に収監され、運動が山場に達したまさにそのときに、ガンディーは運動を一時停止します。暴力事件を避けるための必要性や、イギリスとの政治交渉のタイミングについて慎重な考慮があったと推察しますが、ガンディーに従い、決死の覚悟で犠牲を引き受けた若者たちやナショナリストの指導者には恨みが残った。しかも、ガンディーだけが刑務所から釈放されて優雅にイギリスに渡り、バッキンガム宮殿で国王とお茶を飲むとは何事だ、というわけです。チャンドラ・ボースも、そうした思いを抱き、傷ついた若手指導者だったと思います。ガンディーを暗殺したグループの男性たちも、そうした経験をしたとされます。そして、インド・パキスタンの分離独立後、「ガンディーがインド民族を裏切り、不当にイスラムに譲歩してパキスタンが出来てしまった」という批判を強め、ヒンドゥー至上主義者として活動したのです。

とはいえ、すでに高齢となったガンディーは、何度か命も狙われていましたから、自分の死に方を模索していたのではないかと思います。そして、自分がどんな死に方をしたほうがよいのか、インドのために役立つ死に方は何かを、真剣に考えていたようです。なかでも、自分の死によってインド中が大暴動になり、多くの人々が殺されるような事態は避けたいと考えていたと思います。死の直前には、新しい国家の首都ニューデリーで、財閥で友人のビルラーの邸に身を寄せ、パキスタン側から逃げてきた難民を救済したり、宗教暴動を抑えるために和平の合意を取り付けたりしていました。最後まで平和を築くために尽力していたのです。そして、ビルラー邸の庭で毎日夕べの祈りを開いて講話をしていたのですが、そこには誰でも自由に参加できることになっていました。その集まりのためにいつも通り邸を出たところを、暗殺者に襲われて凶弾に倒れました。78歳のときでした。

立教大学法学部教授 竹中 千春 先生のプロフィール

東京大学法学部卒（1979年）

東京大学法学部助手、東京大学東洋文化研究所助手、立教大学法学部助手、明治学院大学国際学部助教授、同教授を経て、2008年より現職。

公益財団法人日印協会理事、公益財団法人国際文化会館評議員。一般財団法人NHKインターナショナル理事。日本平和学会会長。

主な著書に、

『世界はなぜ仲良くできないの？暴力の連鎖を解くために』（CCC メディアハウス、2004年 Kindle 版）

『盗賊のインド史—帝国・国家・無法者』（有志舎、2010年、第27回大平正芳記念賞受賞）

『ガンディー平和を紡ぐ人』（岩波新書、2018年）

子供向けの著書に、『千春先生の平和授業 2011～2012 未来はこどもたちがつくる』（朝日学生新聞社、2012年）

監修『平和を考えよう（全2巻）』（あかね書房、2013年）。